何のための「授業の英語化」か？
英語化マニフェスト 2016(学生篇)

平成 28 年 3 月 11 日
教育企画会議議長（教育担当理事）
柴田正良

言葉なんかおぼえるんじゃなかった
言葉のない世界
意味が意味にならない世界に生きてたら
どんなによかったか

田村隆一『言葉のない世界』(1962)「帰途」から

そのように詩人は嘆く。「日本語とほんのすこしの外国語をおぼえたおかげで」、他者と共につくる意味の世界へと帰ってこざるをえないから、というのがその嘆きだ[1]。しかし、詩人のこの溜息は彼の本心ではあるまい。なぜなら、言葉が私たちを否応なく繋ぎとめる世界とは、私たちが沈黙の獣ではなく、人として生きる世界だからだ。

１． 金沢大学の状況

学生のみなさん、金沢大学は、平成 26 年度に文部科学省の SGU（スーパーグローバル大学）創成支援事業に採択され、また翌 27 年度には第 3 期中期目標･中期計画の重点支援枠組みにおいて、いわゆる第 3 類型の大学、すなわち「世界のトップレベルの大学と伍して国際的な教育研究の成果を挙げる」大学を目指すことを選択しました。この 2 つのことは、学生のみなさんにとって、これまで以上の「教育の高度化と国際化」が授業やキャンパスライフにおいて進行することを意味します。これから、海外留学や海外研修への強い薦めが先生方からあるのはもちろんのこと、キャンパスの至る所で海外からの留学生と袖を摺り合わせることになるでしょう。なかでも、SGU 事業で社会に約束した達成目標の一つ、「平成 35 年度までに全授業のうち、学士課程において平均 50%以上、大学院課程において原則 100%の授業を英語で実施する」は、現在のみなさんにとって「脅威」かもしれません。それだけではなく、同じく SGU 事業ではその年度までに、学生の 75%以上が、また大学院生の 85%以上が TOEIC760 点（／TOEFL-iBT80 点）、を達成すると宣言していますが、これもまた、みなさんにとって「はなはだ迷惑」な目標設定だと思われるかもしれません。

しかし、一体なぜ本学はこのような厳しい目標を掲げたのでしょうか？　また、一体なぜみなさんは、本学で学ぶのにこのように圧倒的な英語化の試練を受けなければならないのでしょうか？　これは試練や災難などではなく、大きなチャンスなのだということを、

[1] 『田村隆一詩集』、田村隆一、思潮社、1968、p.32

本学の教育全体を担当する教育企画会議議長（教育担当理事）の立場から、みなさんに訴えたいと思います。

２．３つの英語

これからの社会において、また、これからのあなたにとって、英語が必要であるばかりか豊かさの一つでもある､ということを３つの場面を通してまずイメージしてみましょう。

あなたが、かけだしの研究者で、いまアジアの奥深くかアフリカの海岸の都市で研究発表をするところだとしてみましょう。そのような場合、まず、その都市へ辿り着き、ホテルで落ち着くまで、現地語ができないあなたにとって、一般的にどんな言語ができたら心強いでしょうか？　英語だ、というのがその答えです。それは、英語が他の言語より「言語そのものの観点」において優れているからではありません。ストレートに言えば、地球上で現在、最も多くの人々が英語を使用しているからです。ですから、いま想定している状況で、あなたが頼みとするのは、私の考える３つの英語のうちでも、最もタフなレベルの英語、すなわち「サバイバルの英語」だと思われます。

それは、現地語のできないあなたと、日本語のできない現地人との最低限のコミュニケーションを可能としてくれる英語。バスに乗るとき、ランチを注文するとき、ホテルの支払いにクレームをつけるとき、その英語ができなければ、あなたは随分と困ったことになるでしょう。

しかし、それだけではありません。あなたの本来の目的は研究発表です。あなたは、発表の中身を最上のものとするために英語の文献を読み解き、言いたいことを英語でしっかりと表現し、英語の質問にもうまく答えられるような｢正確な英語｣を必要としています。これが２番目。とくにこの場合は、あなたの専門領域に関する英語が必要です。これもまた、いろいろな理由から、文学や歴史の世界ばかりでなく政治や経済の世界でも、多くの報告書や研究書が英語で書かれ、論争も英語で行われているという事情があります。理工系や医薬保健系に至っては、英語での論文執筆や学会発表が人社系よりも先行し、世界中、今や当然のこととしてこれを避けては通ることはできません。これは基本的に、アカデミア（学問）の世界においても、教育や研究に英語圏の国々が多大の資金投下をしてきた、ということの歴史的結果と言うことができるでしょう。

しかし最後に、発表を終えてホテルで一息ついたとき、英語文化の歴史と広がりが与えてくれる｢深い英語｣の世界をあなたが堪能できたら、私はあなたをどんなにか羨むことでしょう。小説や詩ばかりかその背景にある神話や伝説、さらに音楽や映画の英語すらも楽しめたら、これほど素晴らしいことはありません。ホテルのソファで、（ひょっとしてビールを飲みながら）あなたは、英語の世界に沁みだした見知らぬ人々の豊かな心に出会うはずです。冒頭の詩人が逆説的に詠った、人と人の「つながり」を辿って。

あなたが研究者でなくったって、同じこと。残念ながら、私はいまだに、そのような３つの英語を十分に身につけることができていない。しかし、みなさんは違う。みなさんな

ら、今からそれを始められる。

３．キャリア・パスを生き抜く

さて、もう少し現実味のある世界に戻りましょう。大学を出て、社会に船出するための最初の試練の場で、みなさんの英語力はみなさんの夢の実現を左右するかもしれません。

2016 年 1 月 4 日付の電子版「読売新聞」には、「外務省が 2016 年度から、入省する職員に TOEFL で 100 点以上（または IELTS で 7.0 以上）の獲得を目標に課すことを決めた」というニュースが掲載されました[2]。同様に、平成 27 年度の国家公務員総合職試験から、外部英語試験の活用がはかられ、TOEFL-iBT、TOEIC、IELTS、英検の４種類の検定試験において、スコア等に応じて総得点に 15 点、または 25 点が最終成績に加算されることになりました[3]。例えば、TOEIC 600 点以上は 15 点、730 点以上は 25 点が加算されるとのことですから、平成 25 年度の総合職合格最低ライン、492～566 点にとっては、かなりインパクトが大きいと言うことができます。

それどころか、この方式は、教員採用試験でも徐々に拡がり始めています。お隣の福井県では、平成 29 年度の県公立学校教員採用試験から、すべての校種と教科で英語検定試験を活用し、スコア等に応じて加点する方式への変更が発表されました[4]。また、同様に、2016 年 1 月 24 日付の電子版「朝日新聞 DIGITAL」は、大阪市で、平成 29 年採用の教員選考において、小学校の１次、２次試験の両方で英検の級や TOEIC、TOEFL などの成績に応じ、60～20 点を総得点に加算する、と伝えています[5]。小学校教員の場合、１次試験の総得点は 600 点、２次試験は 870 点なので、この加点幅は、同様の加点制度に比べても「全国最大規模」となる、と大阪市教育委員会は胸を張っているそうです。

さらに、一般的なビジネスの世界では、英語力の違いが年収の違いとなって表れている、というのが通説のようです。これに関するインターネットの様々な記事を見ても、慎重な論調のものもありますが、両者の相関性を正面から否定しているのはまず見当たりません。もっとも、これは、高い英語力とビジネス関連の様々な能力との間に強い関連性があるなら、「相関関係、必ずしも因果関係にあらず」の典型例かもしれません。

いずれにせよ、例えば、2008 年 5 月号の「プレジデント・ファミリー」の記事によれば、30～40 代の有職者、男女 1,000 人にアンケートを実施した結果、英語ができる人とできない人の差は、年収ベースでおよそ 210 万円となっています[6]。ここで、「英語ができる人」というのは、「TOEIC 760 点以上、TOEFL 540 点以上、英検準 1 級以上のいずれかを持つ人」

---

[2] http://www.yomiuri.co.jp/politics/20160103-OYT1T50111.html

[3] 「国家公務員採用総合職試験における英語試験の活用について」、人事院、www.jinji.go.jp/kisya/1312/sougoushoku-eigoshiken.pdf

[4] http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/gakukyousei/jouhou.html

[5] http://www.asahi.com/articles/ASH3K5TSYH3KPTILO2N.html

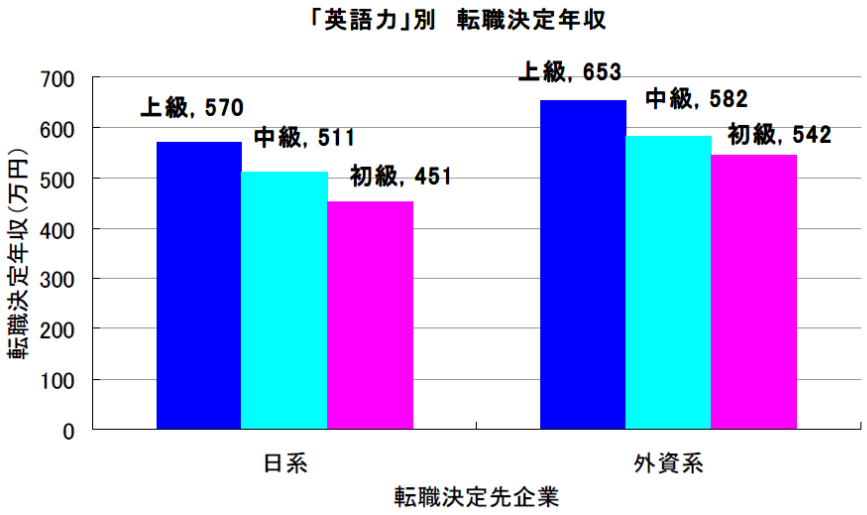
[6] http://www.president.co.jp/family/backnumber/2008/20080500/4517/4532/

と定義されており、英語ができる人の平均年収は 704 万円、英語ができない人の平均年収は 494.6 万円であったということです。

また、2013 年 11 月の「マイナビ・ニュース」のトップには、「英語力のある人の給料は、平均の 2 倍以上!?－50 代後半では約 800 万の差が」というタイトルが踊り、エンワールド・ジャパンが行った「日本と韓国における給料と英語力の関係についての調査結果」を紹介しています[7]。それによれば、英語力のあるバイリンガル求職者の平均給与は、両国ともに全体平均を上回っており、20 代で約 1.5 倍、30 代で約 1.7 倍、40 代以上では 2 倍以上の差がついています。

もう少し学術的な観点から分析を行い、TOEIC のスコアと給与水準が単純な比例関係にはないことを論じた黒澤(2011)も、その第一の結論では、「本人申告による英語力が高いほど、転職決定年収・転職決定率は、高くなる」と述べています[8]。細かな論点はともかく、そこでは、英語力を以下の３段階に分けたとき、それらと「転職決定年収」との関係は、以下の図のようになると分析されています[9]。

上級：ビジネス上でのプレゼンテーション、交渉能力有り
中級：ビジネス上でのコミュニケーション可（会議参加、上司への報告等）
初級：日常会話での最低限のコミュニケーション可



もちろん、これらのデータは、英語ができさえすれば収入が増す、ということを示して

---

7 http://news.mynavi.jp/news/2013/11/12/218/

8 黒澤敏「英語力・TOEIC と転職決定年収・転職決定率の関係」、グローバルホワイトカラー人材マーケット 調査レポートシリーズ No.8、http://www.jac-recruitment.jp/service/customer/report/008.html、2011、p.1.

9 Ibid., p.3

いるのではありません。むしろ、こうしたレポートが一様に指摘しているのは、企業や会社で大事なのは、「一定の英語力」に加えて、様々な仕事上の能力やスキルを向上させることだ,ということです。しかし、それは裏を返せば、「一定の英語力」が就職や昇進の前提条件になっている、ということです。先に見たように、みなさんが自分のキャリアを始めることになる企業や官公庁でも、その傾向はますます強まっているようです。地方都市に本社のある中小企業でさえ海外展開を余儀なくされ、どんな田舎の地方自治体でも外国人居住者への対応はもはや避けられません。たとえ表立った英語力重視を謳っていなくとも、英語外部検定試験の成績を就職試験の際の「足切り」に用いている、というのが現在の多くの企業の実態です。

ですから、みなさんが未来の大空を翔るには、強靭な英語の翼が必要なのです。

４．授業とキャンパスの日常

(1)授業の中で

みなさんがこれから受けることになる「英語化された授業」とは、一体どういうものでしょうか？　私たちは、みなさんにどういうスタイルの授業を用意しているのでしょうか？　その具体的な姿を知ってもらうために、ぜひ、この「英語化マニフェスト 2016（学生篇)」と対をなす「英語化マニフェスト 2015（教職員篇)」を参照して頂きたいと思います[10]。そこでは、授業の英語化のスタイルを４つに分け、番外で「(ｖ)「全く英語化できない」･･･そのような科目は存在しないでしょう」と述べています。このことからも推測できるように、私たちの「授業の英語化」は、段階的なスタイルを持った柔軟なものです。それは、以下のような特徴をしたステップと考えることができます。

（ｉ）「完全英語化」･･･授業の説明及び教材等のすべてにおいて 100%英語が用いられている。

ただし、これは、英語しか理解できない留学生の受講を想定したものであり、日本人学生にとっては、この「完全英語化」は、無理矢理に追求すべき理想ではないと考えています。

（ⅱ）「部分的英語化」･･･授業の説明及び教材等のそれぞれに関して、かなりの割合で英語が用いられている。

この比率が 80%以上であれば、私たちの「英語化」の基準を満たしていることになります。しかし、比率にそれほどこだわる必要はありません。数学や物理学などの理系の基礎的科目、心理学や経済学などの文系の理論的科目などに関して、学生の理解度を睨みながら、適切な割合で英語化を進めるべきでしょう。

[10] http://sgu.adm.kanazawa-u.ac.jp/kusgu/pdf/01_Manifesto.pdf

（ⅲ）「説明やディスカッションを少しでも英語で」･･･授業内容として有益かつ効果的な部分を少しでもオーラル英語によって説明・議論する。

これは、上の（ⅰ）や（ⅱ）の裾野を広げることであり、本学の英語使用環境の充実を担う本体だと考えられます。適宜、英語による資料と組み合わせながら、一見、英語化が困難と思われる多くの科目でも行われるでしょう。

（ⅳ）「教材等を少しでも英語で」･･･テキストや講義資料、試験問題などの教材等に関して、有益かつ効果的な部分が英語化されている。

このスタイルの授業も、（ⅲ）と同じく、上の（ⅰ）や（ⅱ）の裾野を広げることであり、本学の英語使用環境の充実を担う本体だと考えられます。国家試験の必修科目や教職科目など、日本語による説明が学生から強く要望される幾つかの科目では、このスタイルの授業が行われるでしょう。つまり、これは基本的にどの科目でも実施可能です[11]。

以上のように、みなさんは、普通の授業の中で（ⅰ）～（ⅳ）までの様々なスタイルの授業に出会うことになります。なぜ私たちは、このような様々なスタイルの「授業の英語化」を実現しようと考えたのでしょうか？ 私たちは、「授業の英語化」の意味を、学生に、(1)自分の受けた講義や専門分野の内容を英語で理解させ、英語でそれを他者に伝えることができるようにさせること、また(2)授業を通して英語によるコミュニケーション能力を向上させ、それを将来の職場において活用できるようにさせることだと考えました[12]。したがって、みなさんがこれまで通りに授業を理解し、授業に積極的に参加することがおろそかになったのでは本末転倒です。だからこそ、授業の様々な場面、様々な要素を捉えて、「英語化の裾野」を全学的に拡げていくことが、「100%の徹底した英語化」といった勇ましいスローガンよりも重要だと私たちは考えたのです。

ですからみなさんは、英語化された授業の中で、分からないことがあったら堂々と（英語で）質問し、前より一層（これも英語で）アクティブに授業に参加することが求められます。「授業で用いられる英語の理解」ではなく、「英語を用いて行われる授業内容の理解」が最終目標だからです。

もちろん、「授業の英語化」を進めるに当たって、本学はすでに幾つかの学生支援策を実

---

[11] Ibid., pp.4-6.
[12] Ibid., p.3

施しています。例えば、平成 26～27 年度にかけて、(1)タフツ大学[13]から英語講師を招いて学内で開講しているスーパーグローバル英語プログラム（学生向け）、(2)英語外部検定試験に関する受験料補助（学類の 1～3 年生対象）、(3)学生個々人に合わせた面談式の英語学習アドバイザーの導入、などがそれです。これらは、「授業の英語化」に備えて、みなさんが誰でも利用できる仕組みです（一部、内容や名称に変更の可能性あり）。

(2)授業からキャンパスへ

先に述べた本学の SGU の構想では、やはり 10 年後の平成 35 年度には本学に受け容れる留学生の数を全学生の 20%にまで増やすとしています。およそ 1 万人の学生のうち、約 2 千人が留学生で占められる格好です。みなさんは、その時のキャンパスの風景を想像できるでしょうか？　クラスの中だけでなく、食堂や図書館や体育館に留学生が溢れ、そこら中で、日本語以外の言語による会話が交わされることでしょう。

本学の中央図書館や自然科学系図書館は、留学生と日本人学生とが「学び」を通して日常的に交流できる場として、国際交流スタジオ（Global Communication Studio）を設けました。医学図書館にも、同様の国際交流コーナーがあります。また、こうした物理的な場所を活用した、留学生との交流活動の「場」として、例えば、公認サークル「国際交流室（KISSA)」があります[14]。ここでは、サロンのような雰囲気で、インターナショナルカフェやパーティ、ランゲージコースなど、様々なイベントが開催されています。

こうして本学の至るところで、フランス語やドイツ語、中国語や韓国語、ベトナム語やタイ語のお喋りが、日常的にみなさんの耳を打つに違いありません。できればその時、みなさんには英語以外の言語にも慣れ親しんでおいてもらいたいと思います。しかし、多言語の会話が可能になるには、英語によるしっかりしたコミュニケーション能力がベースとして必要です。ですから、まずは、私たちと一緒にみなさんも、このキャンパスの景色を一変させ、英語によるバイリンガル・キャンパスを創り出すことを目指しませんか。それは少し苦しい経験でもあるかもしれませんが、わくわくするような知の冒険でもあるでしょう。日本語と英語が織りあげる多様な知のデザインとしてのバイリンガル大学、そしてその先に確かに見えるマルチリンガル・キャンパスを、一緒に目指しましょう。

最後に、本学の英語教育の最前線に立つ若い先生からのメッセージをみなさんにお届けして、このマニフェストを締めくくることにします。

「英語に使われるな！　大事なことは、まず自分が何をしたいか、そして、それを実現するために、大学で身につけた知識・教養と英語をどう使い、その結果、社会に少しでも良い影響をどう与えられるかだ！」

---

[13] 1862 年に設立された米国マサチューセッツ州の名門大学。THE2016 年大学世界ランキング 127 位。

[14] http://kissa.wp.xdomain.jp/